

(始良郡吉松町川西字セツ谷・石打)

位置と環境

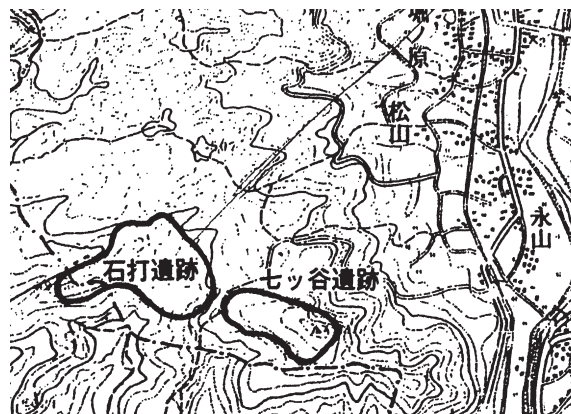
セツ谷遺跡・石打遺跡は町の中心部から南西に約3.5km離れた栗野町境付近の傾斜地に位置する。セツ谷遺跡は標高490m～465mに、石打遺跡は標高438m～426mにあり、両遺跡とも標高の高い地点に発達した遺跡である。両地区は安山岩の巨石が多く点在するところで、また3か所の湧水地点があり、遺跡はこのような自然環境の中に形成されている。

調査の経緯

セツ谷遺跡は、昭和43年の草地改良の際に古墳時代の土師器が出土し、石打遺跡は昭和46年畑地の整地作業中に縄文時代前期の土器片が確認されていて、いずれも周知の遺跡として知られていたが、リンデンパークカンントリー株式会社のゴルフ場建設が行われることになり発掘調査が必要となった。調査は吉松町教育委員会が主体となって行った。

まず、遺跡が広い範囲に存在することが予想されたことから遺跡の範囲・性格を詳細に知るため平成3年に確認調査を実施した。確認調査は建設予定区域内に2m×3mの広さを基本に、セツ谷遺跡で44か所、石打遺跡で36か所の試掘を行った。

この結果、セツ谷遺跡は4つの地点に、石打遺跡



第1図 セツ谷遺跡・石打遺跡の位置

は3つの地点に分かれて遺跡が広がっていることがわかった(第3図・第4図)。特に石打遺跡第3地点は、県内でも発見例の少ない縄文時代前期の住居跡が確認され重要な遺跡であることがわかった。

その後、開発と文化財保護の調整を図るため協議が行われ、石打遺跡第1地点の本調査と石打遺跡第3地点の一部約9,500㎡は現状保存が可能となり、そのほかは本調査が必要となった。

本調査は、平成4年から6年にかけて行われ、調査面積約18,000㎡にも及ぶ大規模な調査となった。

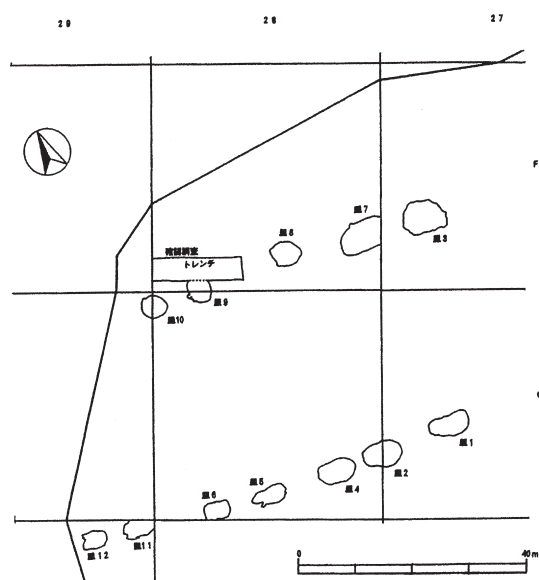
なお、セツ谷遺跡第1地点は、平安時代の土坑1基と坏が1個体出土したのみで、遺跡の広がり認められず確認調査で終了している。

遺構と遺物(セツ谷遺跡)

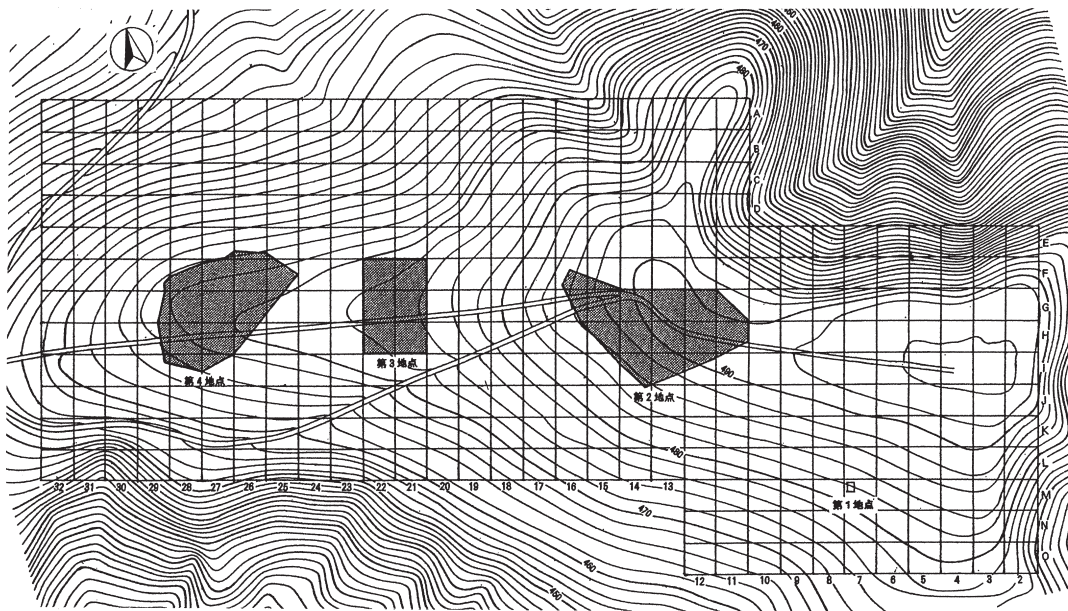
遺構は、第2地点に土坑23基、第3地点に土坑8基、集石2基、第4地点に皿状土坑12基、土坑3基が検出された。皿状土坑は奈良時代末から平安時代のものと思われ、土坑と集石は縄文時代早期のものである。出土した遺構で特出すべきは、まず皿状土坑(第5図)である。第4地点のみの出土で、第2図の通り7基と5基に分かれて東西方向に2列に並行に分布していることが確認された。皿状土坑は県内でも発見例が少ないものであるが、今回の調査では用途性格を特定するに至らなかった。

次に、第2地点で発見された土坑(第5図)23基のうち12基の底部に径10cm前後、深さ50～10cm程度の小ピットが確認されたことである。

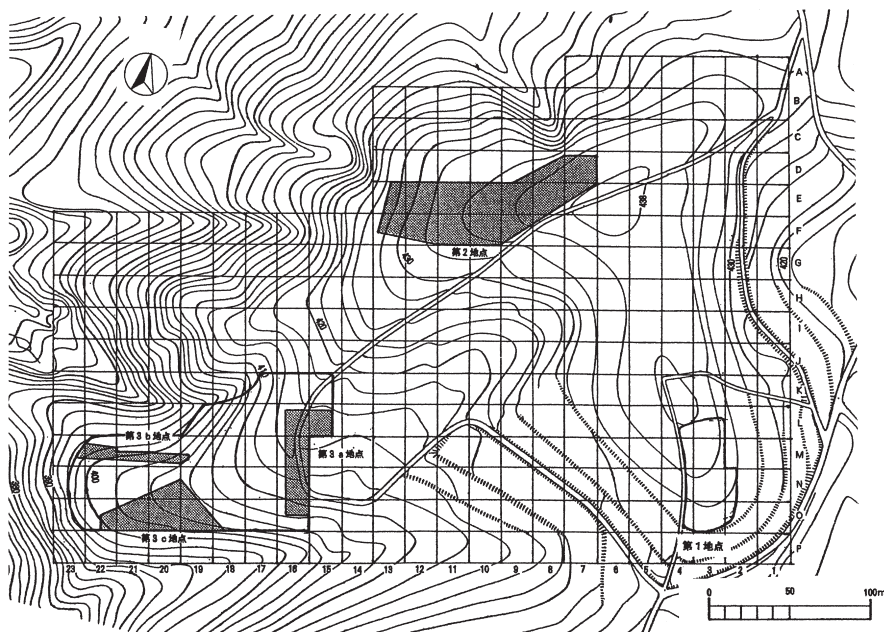
この小ピットは逆茂木の痕跡と考えられることから、小ピットを有するこれらの土坑は落とし穴と特定



第2図 皿状土坑分布図



第3図 セツ谷遺跡調査区域（は本調査区域）



第4図 石打遺跡周辺地形図ならびに調査区域（は本調査区域）

される。次に出土した遺物をみると、まず少量ながら旧石器時代の遺物である細石刃（第6図1・2）・細石刃核（第6図3）が出土した。

遺物は、奈良～平安時代，古墳時代，弥生時代，縄文時代と各時代の土器が出土している。縄文時代早期の土器は，第2地点で塞ノ神式土器を主体に出土している。なかでも塞ノ神Aa式土器は，円筒形の胴部にラップ状に開く口縁部がつく器形（第6図4）が一般的であるが，本地点では外反する口縁部が屈曲して先端部が内傾した二重口縁を呈するもの

（第6図5～7）が出土している。口縁部外面には，平碕式土器の文様に類似したものが施されていることから，平碕式土器から塞ノ神Aa式土器への移行期を示す土器ではないかと考えられる点で注目される。第3地点・第4地点は縄文時代早期の土器で熊本県人吉市天道ヶ尾遺跡や宮崎県えびの市妙見遺跡で出土例が知られている天道ヶ尾式土器を主体に出土している。天道ヶ尾式土器は口縁部や胴部外面にコブ状の突起や隆起突帯が貼付される特徴的な土器で，器形も深鉢（第7図9～11）とともに壺形土器

(第6図8)の出土も確認されている。天道ヶ尾式土器が県内で出土した報告例は少ない。また、第4地点では、アカホヤ火山灰層直下に尖底の貝殻条痕土器(第7図12)が1個体出土しており、これは轟式土器の成立期の土器を検討し、その土器の系統を考える上で重要な資料となっている。七ッ谷遺跡ではこのほか下剝峯式・円筒土器・押型文・平桁式土器等が出土している。

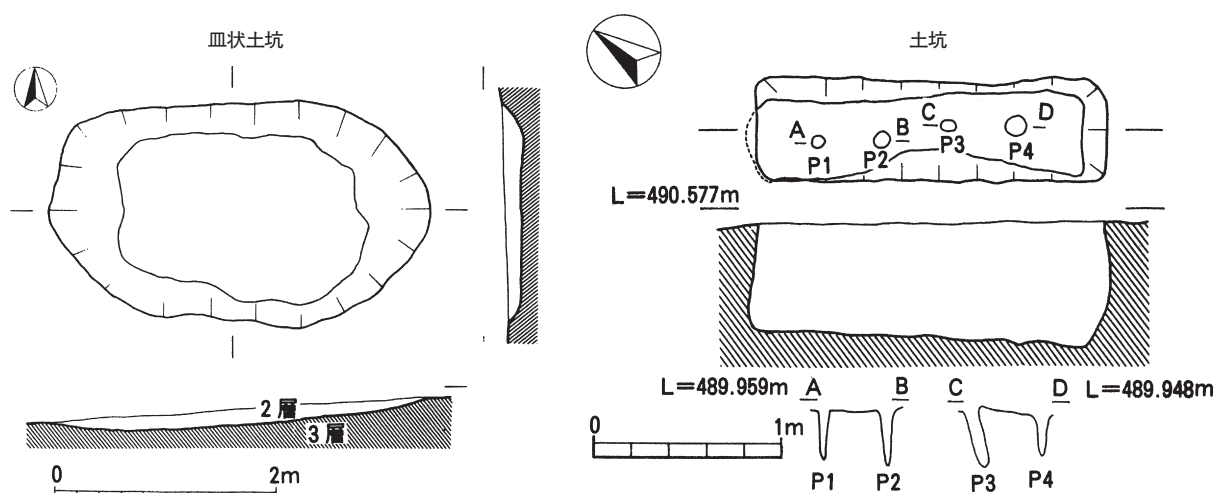
石器は、打製石鏃(第7図13~17)・石匙・スクレイパー(第7図20)・ドリル・磨製石斧(第7図21)・磨石・石皿・用途不明の異形石器(第7図18~19)など多くの器種がみられ、出土量をみると各地点とも圧倒的に石鏃が多い。特に、第2地点の縄文時代早期の石鏃は107点も出土しており、ピットを有する土坑の検出をも考慮すると、第2地点は狩猟を行うのに好適地であったことがうかがえる。また、石

材も黒曜石・チャート・安山岩・めのう・玉髄・鉄石英と多種の石材が使われており、黒曜石も本県大口市日東産のほか長崎県針尾産・大分県姫島産・佐賀県腰岳産のものが確認されており、当時の交易圏の広がりがわかる。

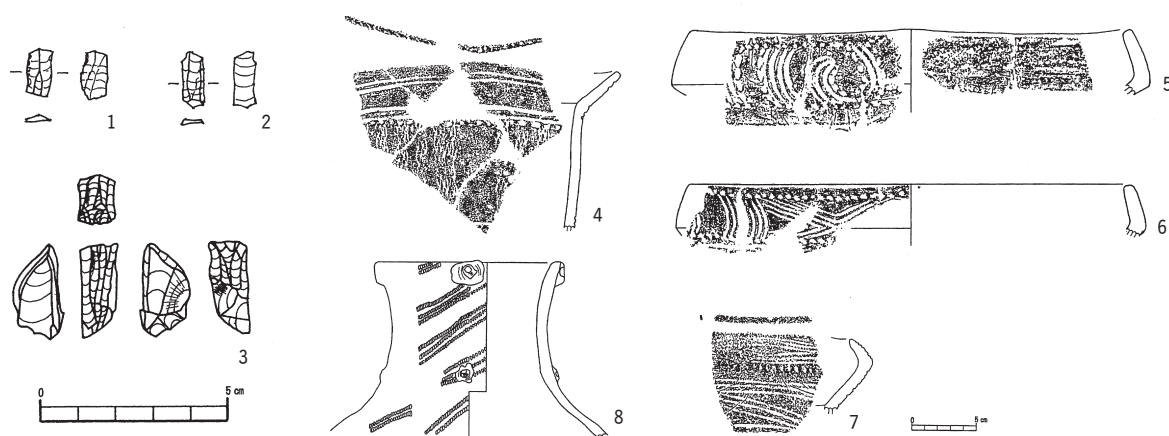
遺構と遺物(石打遺跡)

遺構は、第2地点に炉跡4基、皿状土坑1基、集石12基、土坑4基、第3地点に炉跡4基、皿状土坑3基、集石13基、土坑3基が確認されている。

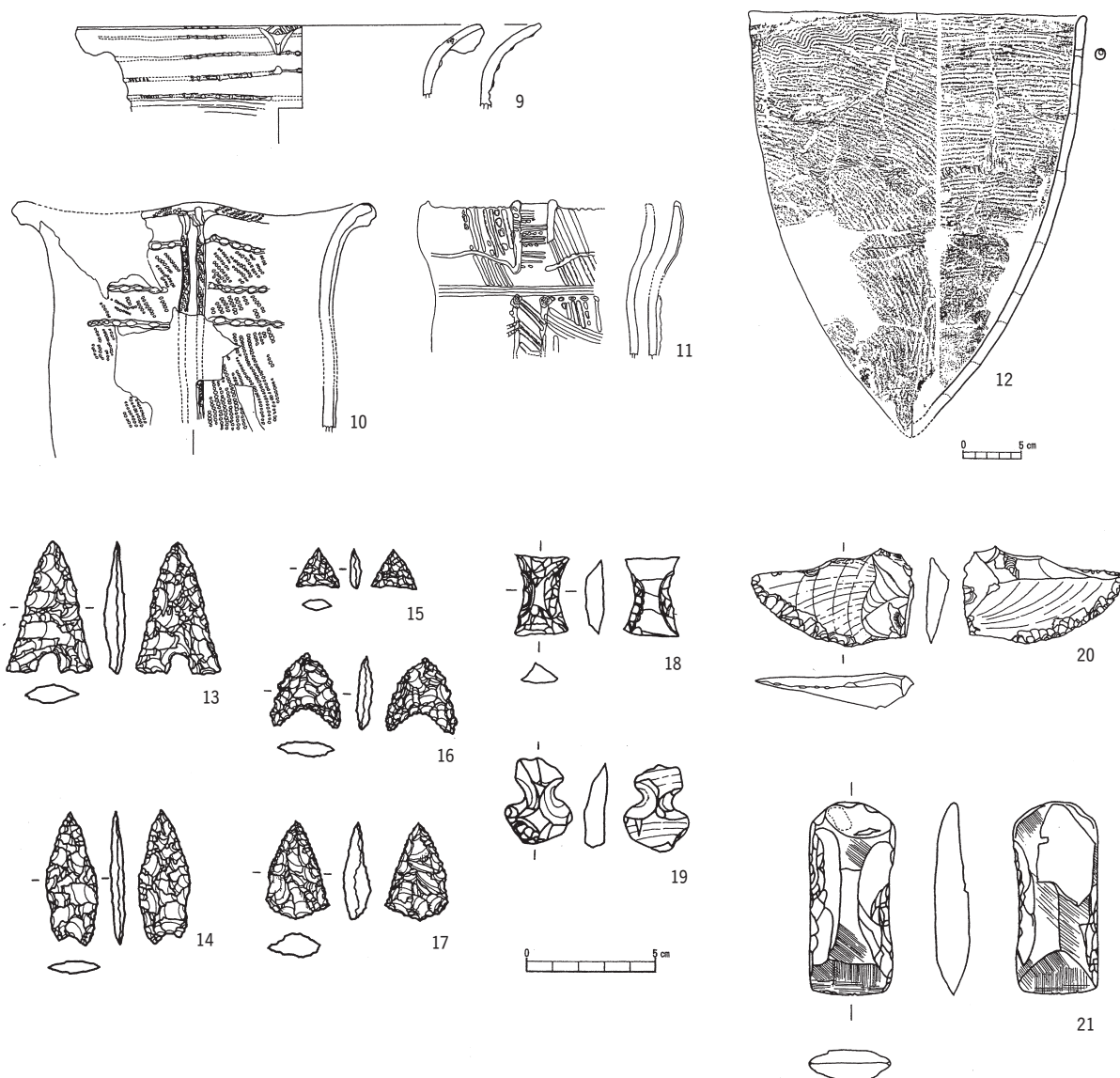
炉跡と皿状土坑は奈良~平安時代のもものと推定され、集石・土坑は集石の1基が縄文時代前期以降のものであるほかはすべて縄文時代早期のものである。一般に蒸し焼きの調理場跡といわれる集石は、七ッ谷遺跡での出土は2基と少なかったものの、石打遺跡では上記の通り25基発見されている。出土の状況は、礫が散在して検出されたものがほとんどであっ



第5図 皿状土坑ならびに土坑



第6図 出土遺物



第7図 出土遺物

たが、第3地点の10号集石と11号集石（第8図）は礫が集中して発見されている。

10号集石は、成人の握りこぶし程度の大きさの礫で、一方11号集石は板石状の礫で構成されており、11号集石は掘り込みを有するものである。礫は両遺跡に転石として多く見られる板状節理のある安山岩が使用されている。

七ッ谷遺跡で列を形成して出土するという特徴を持った皿状土坑は、石打遺跡では単独の出土で、その特徴は確認されていない。

次に出土した遺物をみると、まず本遺跡でもわずかであるが、旧石器時代の細石刃が確認されている。

土器は、七ッ谷遺跡と同様に奈良～平安時代、古

墳時代、弥生時代、縄文時代と各時代の土器が出土している。縄文時代早期の土器についてみると、第2地点では、塞ノ神Bd式土器（第9図23）を主体に、また第3地点では、山形・格子目・楕円などの押型文土器（第9図22）や塞ノ神式土器を主体に出土している。本遺跡で特出すべきは、山型押型文を横方向に回転押捺後、間隔をおいて横方向に貝殻腹縁条痕文を施した円筒形の土器（第9図24）である。南九州で盛行した貝殻文と北九州を経て伝播してきたとされる押型文が融合する初見の土器として注目される。早期ではこのほか前平式・石坂式・下剝峯式・円筒形貝殻条痕文・手向山式・天道ヶ尾式・平栢式土器などが出土している。石打遺跡では早期の

ほか前期・中期・後期・晩期の土器の出土も確認されている。

石器は、七ッ谷遺跡と同様の器種が出土しており、出土量をみると、石鏃が最も多く、特に縄文時代早期の石鏃は、第2地点で150点、第3地点では226点と多量に出土している。また、生活実用品以外では、蛇紋岩製の垂飾品（第9図25）が出土している。これは縄文早期にはすでに垂飾品を身につける習俗があったことを示す貴重な資料である。

特徴

七ッ谷遺跡・石打遺跡は、縄文時代の土器の変遷を考える上で貴重な資料が多く重要な遺跡となっている。

また、縄文時代早期では落し穴と思われる遺構や

石鏃が多量に出土していることと同時期の住居跡が1基も検出されていないことからキャンプ的な狩猟生活が繁栄していたことが考えられ、標高が高い台地上での縄文人の生活の様子を知る貴重な遺跡となっている。

資料の所在

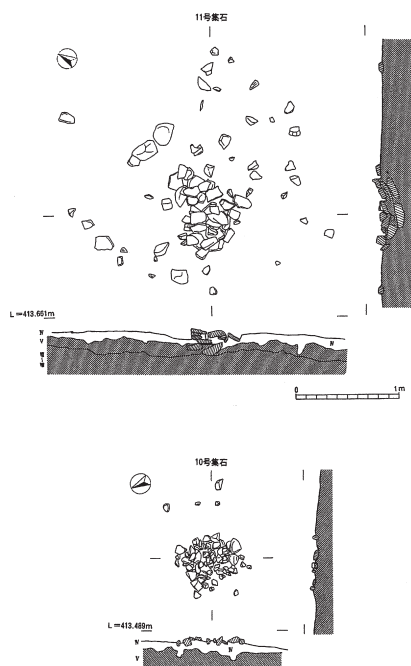
出土遺物は、吉松町教育委員会に保管されている。

参考文献

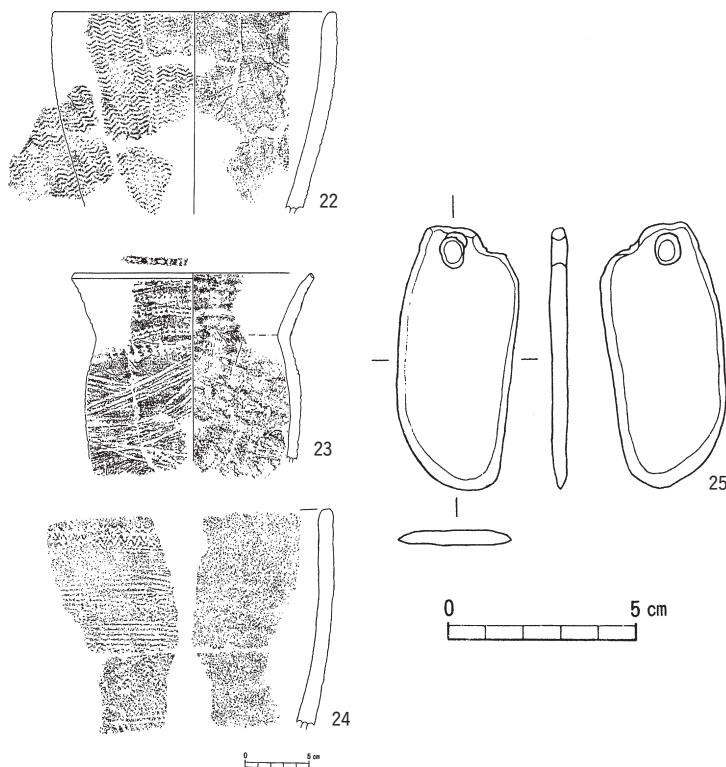
吉松町教育委員会1992「七ッ谷遺跡・石打遺跡（概報）」『吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書』（3）

吉松町教育委員会1999「七ッ谷遺跡・石打遺跡」『吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書』（4）

（藤井義則）



第8図 集石



第9図 出土遺物